

熊本県立宇土中学校 令和5年度(2023年度)学校評価計画表

1 学校教育目標
 熊本県教育委員会の「令和5年度県立中学校・高等学校における教育指導の重点」及び「令和5年度人権教育取組の方向」等を中心に据えながら、全職員が教育者としての自覚と使命感、教育的愛情と人権感覚を持ち、資質と指導力の向上に努め、生徒一人ひとりの個性を伸ばしながら、知・徳・体の調和が取れ、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、たくましく生きる力を備えた将来のリーダーとなる青年の育成に努める。さらに、本校建学の精神である「質実剛健」のもと百年を超える伝統を継承しつつ、中高一貫教育校として新たな発展と創造をめざす。
 中高一貫教育校としての利点を生かし、効果的な教育のあり方を研究するとともに、地域との連携をより一層深め、地域に開かれた特色ある学校づくりに努める。

- 2 本年度の目標**
- | | |
|------------------------|---------------|
| 1 安心安全な学習環境づくり | 2 自治力向上 |
| 3 学習力向上 | 4 探究力向上 |
| 5 多様な進路実現 | 6 グローバル研修の再構築 |
| 7 スーパーサイエンスハイスクールの取組推進 | |

3 自己評価総括表

大項目	評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
	小項目						
学校経営	開かれた学校づくり	・公開授業・発表会の開催 ・広報活動・入学希望者確保	・7月と11月に公開授業、7月に発表会を公開 ・中学校志願者140人以上、高校志願者200人以上	・UTO Well-Being探究Award2023を熊本城ホールで開催 ・年間4回、小中学校、塾に広報チラシ3000枚配布 ・11月、12月にグランメッセでの探究取組紹介 ・HP、PTA広報誌、同窓会報、テレビCM市・町の広報誌	B	・7月の公開授業では42人の教育関係者の来校、UTO Well-Being探究Award2023では保護者を含めた246人の来場者があり「創造・挑戦・感動」の教育活動の実践を外部に発信することができた。 ・中学校志願者は96人 ・チラシ5000枚配布	
	学校の魅力化	・スーパーサイエンスハイスクールの取組推進 ・将来、国内外で活躍する人材育成 ・生徒主体の活動推進	・探究的な学びの全校展開 ・グローバル研修の再構築 ・自治力向上	・教科の枠を超えた3人組、探究の問いを創る授業デザイン研究会、ウエルビーイング市民講座の開催 ・既存の国内外の研修や修学旅行等を含めた再検討 ・生徒と職員共に従来の体育祭、生徒総会、文化祭等の内容検討と改善 ・校則見直し検討委員会の新設	B	・探究の問いを創る授業デザイン研究会を7月と2月に実施。 ・年間を通じたオンライン英会話を中・高で実施、国内英語キャンプ参加促進等、国内でも校内でもグローバル体験ができる環境を整える方針を職員間で合意形成できた。 ・職員の生徒会顧問を廃止、運営委員が生徒会の相談役となる。	
	本校独自の中高一貫教育プログラムの開発と実践	生徒の本校での学びに対する満足度の開発と実践	・中高一貫6年間の学びを見据えた授業改善 ・中学校独自の体験活動と高校の効果的な学びの接続	・UTO探究週間の新設 ・職員研修11月6時間、1月4時間の実施 ・中高生徒・職員が連携する学習活動・行事・研修等を企画	A	・10/28～11/5の9日間、宇土探究週間を実施した。生徒は自らの学びを俯瞰し、個別最適な学びを充実させた。 ・TSMC関連会社と台湾静宜大学訪問(4日間)を企画、中学生、高校生、保護者、教員の25人の参加。参加者は台湾の工業発展と異文化に触れ、自身のキャリアデザインに影響を受けた。	
	業務改善・働き方改革	時間外従事時間 教職員の健康増進及び福祉の確保	・時間外業務従事時間10%縮減 ・平日の時間外業務従事時間目標(40h) 年休取得12日以上	・放課後時間増(教育課程変更に伴う授業時間減少による) ・ノー残業デー、8月定時出退勤月間の設定 ・月80時間超をゼロにする校務改革 ・12月までに学習アプリ、デジタル採点の検証 ・模擬試験監督等に卒業生からなるスクールサポートスタッフを活用 ・学校閉庁日の設定 ・メンタルヘルス職員研修の実施 ・衛生委員会の充実	B A	・各種調査、授業での小テスト、採点などでICTを活用し、効率化を図った。 ・8月に定時出退勤を実施した。 ・時間外従事時間は昨年度と変わらなかった。 ・卒業生からなるスクールサポートスタッフ導入、職員の休日業務が軽減。 ・年休取得13.2日を達成(昨年の1.1倍) ・長時間勤務者が固定しており、業務の平準化が課題 ・衛生委員会が毎月職員の健康状態、業務負担状況を確認し、指導・助言や産業医面談を行った。	
学力向上	授業の充実	全ての生徒が意欲的に授業に参加する授業の実践	・生徒の理解度及び満足度90%以上の達成 ・生徒U-KI指数45%以上	・個別最適な学び、協働的な学びを踏まえた授業開発 ・教科横断的な学びの実践 ・研究授業・職員研修の充実	B	・学校評価アンケートの授業に関する質問には、肯定的な回答が多かった。評価の工夫・改善に課題がある。中学の生徒U-KI指数は、平均45.3%であった。	
	自学力の育成	個別最適な学び、自学の充実による学力向上	・自学室・自学塾の設置 ・自学時間と成績の相関分析プラス指標70%以上	・AI型教材「Qubena」を活用した個別最適な課題の工夫 ・生徒に見通しを持たせる指導 ・個別指導の充実	B	・Qubenaは活用頻度が高い教科ほど、その教科の学力向上に役立ったという回答が多い。もっと活用し、個別最適な学びを更に充実させたい。	

キャリア教育 (進路指導)	自己の発見とキャリアの基礎構築	教科・総合的な学習の時間・学校行事・生徒会活動等での自己の強み発見	・自身の個性・強みとは何かについて考えた生徒の割合が90%以上	・キャリアパスポートによる振り返り ・二者面談、三者面談での対話的関わり	A	・自身の個性や強みについて考えたことのある生徒は94.3%と、自分自身を振り返る場面を持っていた。キャリアパスポートを6年間のスパンで充実活用させる方策について具体的な検討に入った。様式を固めて新年度に提示していくことが課題である。
		系統的な進路学習による進路意識の向上	・学習実態調査における進路に関する質問で、進路について考えている生徒の割合90%以上	・キャリアデザイン講座の実施 ・インターンシップやワークショップなどで社会人と関わる機会の設定 ・パネルディスカッション ・学力推移調査の分析・活用	A	・進路について考えている生徒は2学期当初で85.4%だった。その後キャリアデザイン講座やパネルディスカッションなど、外部人材の活用を行ったことで、考える機会を設けた。 系統的な進路学習を組み上げ、宇土高校への円滑な接続を進める具体的な取組が課題である。
	将来を見通したキャリア構想	ICTを活用した個別のキャリアパスポートの作成・運用による指導の充実	・生徒全員作成し、主体的な学びにつなげる	・Google classroomの活用 ・毎学期の振り返りと改善 ・個別のフィードバック	A	・年度当初にCPを作成し、Classroomで配信。中学部でも職員への説明を実施。入力に依頼を適宜実施した。作成した用紙を使い面談で活用した。 ・CPの生徒の入力の充実度に差があり、その指導をするための時間的な工夫が必要である。
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	あいさつ・掃除の徹底	・全職員による生徒指導 ・生徒に寄り添った配慮ある対応の実践度80%以上	・生徒の模範となる挨拶 ・教師は授業開始1分前までに教室入室 ・教師が共に取り組む清掃活動	B	・服装頭髪に関して、ほとんどの生徒が昨年度改訂した校則に沿ってできている。 ・全般的に熱心に取り組んでいるが、具体的な指示がないとできない生徒が主体的に取り組めるようにするための指導を工夫していく必要がある。
		交通ルールの遵守とマナーの向上	・交通ルール遵守率80%以上 ・交通事故等1%以内	・定期的な交通指導 ・啓発用のチラシの作成と掲示 ・交通安全教室の実施	B	・全体的な交通ルール遵守はできているが、若干名の違反する生徒がいるため、丁寧な指導が必要。
	自主性や社会性及び公共性を身につける	生徒会中心の行事の運営 各種委員会活動の活性化 校則検討委員会の取組	・生徒会主催の行事の企画・運営の充実度(満足度90%以上) ・目標の明確化、生徒自ら動く委員会活動の実践、達成感90%以上 ・Google classroomを活用したアンケートの実施	生徒総会、文化祭、クラスマッチの見直しと、より一層の充実 生徒会執行部の主体による各種委員会の開催と年間計画に沿った活動の実施 各種委員会の常時活動の活性化 生徒主体の校則検討の取組	A B	・生徒会執行部や委員会が協力して、生徒主体で発案したプラボー祭や球技クラスマッチを実施することができた。 ・年間計画を作成することで、見直しを持って活動させることができた。 ・常時活動が活発な委員会とそうではない委員会と差が見られた。 ・校則検討委員が自ら、校則を見直しより良くしていくための意見を出し合い、主体的に活動することができた。
人権教育の推進	命を大切にすることを育む指導	自他の人格を大切に、あらゆる差別の解消をめざす生徒の育成	・自他を尊重する意欲や態度の育成 ・他者を共感的に受容するコミュニケーション力の育成	・人権作文、標語等の作成や応募 ・各クラスや中学集会での啓発 ・人権LHRや講演会の実施	A	人権メッセージ・標語については学校全体で取り組み、積極的な参加、応募が見られた。いじめ防止委員会ではメッセージ・標語の選考、展示さらに宇土市のイベントでも発表した。
	人権教育の指導方法の改善・充実	学校の教育活動全体を通じた人権教育の推進と組織的な取組	・全職員による共通理解と実践 ・家庭への啓発	・学期1回の職員研修の実施 ・学期1回の人権LHRの実施 ・学期1回の人権だよりの発行	B	職員研修や「人権子ども集会」への全員参加など、LHRを活用することはできたが、保護者への啓発に関してはさらなる取組が必要である。
特別支援教育	特別な支援を必要とする生徒への適切な支援と対応	生徒の特性に応じた指導・支援の充実	・個別の教育支援計画及び指導計画の作成と活用 ・職員研修の充実	・全職員での共通理解と共通実践・評価 ・生徒理解研修年2回の実施(外部講師の活用) ・ICTを活用した学習支援の充実	A	・中学部全職員で4月と10月に個別の指導計画について共通理解、3月に評価を行う。 ・教育相談担当職員による生徒対応についての職員研修を実施した。 ・別室登校や欠席生徒にリモート授業やキュービナを活用した学習支援を行った。
		組織的な対応	・関係機関との連携 ・校内特別支援実践委員会の活用	・小学校・高等学校への確実な引継ぎ ・保護者や専門機関との連携 ・SC・巡回相談の活用 ・校内特別支援実践委員会を学期1回開催	B	・中2に生徒を対象にSCによるストレスマネジメント講話を実施した。 ・SC・SSWと連携し対応した。他の専門機関との連携や校内委員会の充実を図りたい。

いじめの防止等	いじめ防止に向けた生徒と職員の協働	いじめのない学校作り	アンケートを毎月実施することでの現状把握	・アンケートによる現状把握、情報収集、共通理解 ・生徒による「心のきずなを深める月間」の取組	A	・毎月アンケートを実施した。気になる書き込みがあったときは生徒指導部から担任へ連絡があった。 ・人権標語、人権メッセージなどの取り組みをした。
		いじめ問題に向けた組織的対応	「いじめが解消された」という回答100%	・情報集約担当者の活用 ・保護者や関係機関との連携	B	・100%解消とはいかなかった。学年部対応になっている現状もあるため、組織として誰が何をどう対応するのか明確にしていく必要がある。
地域連携 (コミュニティスクールなど)	コミュニティスクールの活性化	学校運営の改善	教育課程の編成、学校経営計画、防災体制等、学校全般についての協議	年2回の学校運営協議会の開催	B	学校運営協議会を2回開催し、学校経営計画、地域への情報発信、働き方改革等貴重なご意見をいただいた。委員の前向きな評価・助言を受けて、今後の学校経営に生かしていく。
	地域との連携	地域住民・組織との連携	地域住民・組織・公的機関との連携・協働の促進	「宇土未来探究講座」において、地域住民・組織・公的機関から講師招聘	A	宇土市、宇城市をはじめとする県央地域の市町役所、御所浦アイランドツーリズム推進協議会、うとスポーツクラブ、県博物館ネットワークセンター等、多くの地域・組織と連携を図ることで、様々な体験活動や探究活動に地域資源を生かし、充実を図ることができた。
図書館活動	利用しやすい図書館作り	図書館利用者の増加	図書館からの情報発信の充実により、来館者が昨年度より10%増加	・校内読書月間の実施 ・広報誌『ららいぶらりいたいむず』の定期的発行 ・特設図書コーナーや展示の工夫 ・クラスルーム、HPブログでの情報発信	B	来館者は全体的に昨年度比10%増を達成できた。広報誌、学級文庫設置等、図書委員会活動を通して情報発信ができた。
	読書活動の充実	生徒の読書意欲が向上しているか。	80%以上の生徒の読書意欲の向上	・朝HR前に自主的に朝読書に取り組む。 ・多読クラスマッチ実施・学級文庫の充実	A	各クラス自主的な朝読書の取り組みが見られる。貸出冊数一人あたり前年比3冊増で大きく伸びが見られた。
SSH	第Ⅲ期SSH研究開発の構想の具現化	全生徒を主対象とする視点でSSH研究開発が展開されているか	・UTO Well-Being探究Award2023の開催 ・課題研究の指導方法と運用の再構築	・探究Award2023で、全生徒が当事者意識を持つ準備運用 ・SS/GS/学際課題研究の指導体制と予算及び発表機会の視点を重視した運用の再構築	A	・高校3年の発表機会から中2～高3までの探究成果発表の場、生徒主体の進行へと規模の拡大ができた。特に、中学2年、3年の発表機会も確保できた。 ・SS、学際物理、生理、気象学会に加え、GSのマイプロ、キャリア甲子園、県庁発表等の発表機会拡大ができた。ロジックプログラム関連メディア発信は、TV8件、新聞2件。
		第Ⅲ期採択時に文部科学省から受けた指摘事項に留意できているか	・Well-Beingなど新たな人材育成の成果の可視化 ・計画や準備状況の進捗状況の可視化と無理のない運用	・学校設定科目WB I、JWB、J-Tech、ロジックプログラムのシラバス開発と評価運用、ウェルビーイングシートの開発と運用 ・アセスメントやガイドブック、課題研究の評価等、進捗状況の可視化と整理	B	・WB I、JWB、J-Techにおいて教科横断型授業開発を進めることができ、ロジックプログラムでは全生徒を対象として探究の展開ができている。ウェルビーイングシートはキャリアデザインと関連付けた様式の開発を進めている。 ・課題研究の評価はルーブリック、チェックリストができる体制であるものの、アセスメントの開発は不十分であり開発体制の構築が必要である。

4. 学校関係者評価

- ・生徒主体の活動推進（生徒の自治力向上）について、教員の生徒会顧問を廃止したことは評価できる。一方で教員のマネジメントから生徒の活動が脱しきれないところもある。
- ・観点別評価の適正実施、主体的な学びを推進する上で定期考査を削減したことは評価できる。
- ・生徒アンケートにおいて「学校が楽しい」、「授業がよくわかる」の質問では8割の生徒から肯定的な回答が得られソフト面、ハード面が充実していることがわかる。志願者数減少については内的要因より外的要因の影響が強いのではないか。
- ・生徒募集については学校ホームページを充実することも効果的である。通信制サポート校のホームページは参考になる。多様な学びや進路が詳しく説明してある。
- ・交通ルールの遵守とマナーの向上は高く評価できる。和太鼓部等、地域のイベント等にも連携できており今後とも続けてもらいたい。
- ・宇土中学・高校卒業生が台湾の台南市政府と宇土市教育委員会との交流でスタッフとして活躍していた。

5. 総合評価

- ・今年度より第三期スーパーサイエンスハイスクール事業が始まり、探究の「問い」を創る授業デザイン研究会や授業研修（職員研修）により生徒の主体的な学びや評価の多様化の職員理解が進んだ。
- ・中学3年の生徒が北朝鮮人権侵害問題啓発週間作文コンクール英語エッセイ中学生部門で最優秀賞、科学部地学班が第47回全国高等学校総合文化祭2023かごしま総文で全国2位相当となる「文化庁長官賞」を受賞するなど様々な分野で活躍した。また、本校職員が令和5年度文部科学大臣優秀教員表彰を受賞した。
- ・UT0探究週間(10/28～11/5の9日間)中に姉妹校提携の台湾成宜大学キャンパスツアー(3泊4日、中学生・高校生・保護者・教員の25人参加)を実施、12月には台湾の国立中科實驗高級中學を訪問し(高校生9人参加)、授業参加や自身の課題研究を英語で発表した。コロナ禍前のグローバル研修に戻ることができた。
- ・中学校で一人ひとりに個別最適化された問題を出題するAI学習システムQubenaを導入。今年度は英語の活用度が高かった。Qubenaの活用については、それぞれの教科で改善していく必要がある。

6. 次年度への課題・改善方策

- ・職員一人ひとりが専門性を発揮しながら、学校の活性化のために機動的かつ協働的な組織運営体制を構築するために校務分掌再編を行う。
- ・グローバル研修の再構築として、来年度から年間を通じたオンライン英会話を中学校・高校で実施することを決め、英語運用能力向上と主体的で責任感のある態度、学びの姿勢の育成につなげる。
- ・観点別評価を適正に実施しようとする余り評価が細分化、複雑化し、生徒、教員にも「何を評価しているのか」、「どのように評価しているのか」が見えにくくなっている。生徒の学習改善に資する評価のあり方に大きな課題がある。成績評価規定の見直しを行う。
- ・自転車通学生徒のヘルメット着用についての取組は、「自分の命は自分で守る」、そのために着用する必要があるとの認識の元で進めている。生徒・保護者・教員で合意形成を図り、具体的取組を実施する。
- ・本校の強みを地域をはじめ、より多くの方々へ周知するため、広報や情報発信内容及び発信方法に工夫を行う。